

# [資料紹介] 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵の「柳悦孝コレクション」について

新田 摂子

## Research Materials: The Yanagi Yoshitaka Collections Owned by Okinawa Prefectural University of Arts Library and Arts Museum

Setsuko NITTA

### 1. はじめに

本稿は、2018年度に沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に寄贈された、「柳悦孝コレクション」の資料紹介を行う。柳悦孝（よしとか）は、女子美術大学で教鞭をとり、本学附属研究所初代所長となった織物作家である。「柳悦孝コレクション」は、本学名誉教授で、柳悦孝の息子である柳悦州により寄贈された。その総点数は約790点である。「柳悦孝コレクション」は、2014年度に寄贈された一次資料と、2018年度に寄贈された二次資料からなる。2018年10月26日～11月4日には、本学附属図書・芸術資料館にて、「柳悦孝コレクション」の寄贈を記念した「柳悦孝の緋ー沖縄の緋から造形教育へー」が開催され、計238点が展示された。本稿では、はじめに柳悦孝と沖縄との関わりについて紹介し、続いて資料群ごとの解説を行う。

### 2. 柳悦孝と沖縄との関わり

柳悦孝は、1911年（明治44）に、柳悦多（よしさわ）の長男として、千葉県安房郡に生まれた。父柳悦多は、民藝運動を興した柳宗悦の長兄である。1923年（大正12）当時12歳の柳悦孝は、関東大震災により父親の悦多を亡くす。その後、叔父にあたる柳宗悦の保護を受ける。中学を卒業後、一時は洋画

家をめざすものの、1931年（昭和6）当時20歳の柳は、静岡県浜松のざざんざ織りに出会い、織物の道を志す。

その後、浜松ざざんざ織りの平松工房へ通い織物を習うほか、染色の基礎的手法を学ぶために上村六郎に指導を受けた。1933年（昭和8）には、千葉県で唐棧を制作している斎藤豊吉を訪ね、織物を学んだ。このように柳は、ざざんざ織りの平松氏や唐棧の斎藤氏、上村氏より、織物や染料について学ぶものの、その後は特定の工房の弟子にはならず、ほぼ独学で織物技術を身につけていった。

沖縄との出会いは、1935年（昭和10）、柳は沖縄の染織品を目にする機会に恵まれる。柳は後に、「昭和10年ごろのある日、浜田先生のお宅にお邪魔したら、かなりたくさんのお縄の織物を持っておられ、それを見せてくださいました。私はそのとき、電気に打たれたように、ひどく感激したのですが、さりとて、それをつくり出すような力は、とてもそのころの私にはありません。ただ、その色の美しさ、その模様のお立派さに驚嘆したわけです」（『柳悦孝のしごと 民藝運動と女子美工芸草創期』 p.73）と振り返っている。

その4年後1939年（昭和14）には、柳自身が日本民藝協会琉球調査旅行に参加した。その中で、田中俊雄や外村吉之介と共に、御絵図調査、那覇の古着市での織物の蒐集を行いながら、約6ヶ月間滞在した。翌年1940年（昭和15）にも、二度目の琉球調査旅行に参加し、約4ヶ月間滞在している。

この二度にわたる戦前の沖縄行きは、柳にとって大きな収穫となった。特に、手結い緋と呼ばれる沖縄の伝統的な緋技術は、後に柳によって独自にアレンジされ、展開していった。手結い緋は、緋織物の技法のひとつで、自在に緋模様をつくり出すことができる技法である。他にも、御絵図と呼ばれる琉球王府時代の緋織物の図案を丁寧に模写し、自身の制作に展開している。柳は、緋にとどまらず、組織やウール、ビニロンなど幅広い素材や技法を手がけている。しかし、柳が織物を始める初期の段階で、沖縄の緋織物に出会い影響を受けたことは、柳の工芸織物の方向を決定づけた。

その後柳は、1949年（昭和24）より、女子美術大学芸術学部専任講師として勤め始め、1960年（昭和35）には専任教授、1973年（昭和48）には同美術大学学部長、1975年（昭和50）には同大学・短期大学学長を務めた。女子美

術大学における柳の果たした役割については、『柳悦孝のしごと 民藝運動と女子美工芸草創期』にまとめられているので参照されたい。

1983年（昭和58）には、日本民藝館沖縄分館長となり、同年から沖縄県立芸術大学の設置委員として沖縄を頻繁に訪れた。1986年（昭和61）本学開学時には、本学の初代附属研究所所長及び客員教授となった。1984年（昭和59）以降、柳監修のもと、三菱財団から受けた助成金を元に、日本民藝館所蔵の沖縄織物の復元事業が行われた。この復元事業は、宮平初子（首里織）、大城志津子（首里織）、新垣幸子（八重山上布）によって制作され、その後の沖縄における織物文化の再興に大きな役目を果たした。

以上のように、柳は織物作家として制作を行う傍ら、女子美術大学教員として学生の指導を行った。さらには戦前の沖縄を訪れ、絣織物の技術を学び、本学の開学や日本民藝館所蔵の沖縄織物の復元にも関わっている。柳は独自の作風を生み出した稀有な織物作家であると同時に、大学人として造形教育に取り組み、さらには沖縄織物の復興に尽力した人物であるといえるだろう。

### 3. 柳悦孝コレクションについて

柳悦孝コレクションは、総点数約790点で、柳の作品と関連資料、柳が沖縄及び海外で蒐集した蒐集品とに大別される。柳の作品とそれに関わる資料には、着尺、帯、試織はぎれ、制作ノート、アイデアスケッチ、試織帳、試染帳、混毛帳、原稿、写真、その他に分類される。蒐集資料には、沖縄、インドネシア、台湾、インドなどの資料がある。

#### 3.1 柳作品と関連資料

##### ・着尺、帯、試織はぎれ

着尺と帯の完成品は量としては大変少なく、合わせて約40点である。それ以外にこのコレクションの特徴は、約120点の試織はぎれである。しかも、この約120点（正確には120レコード）は、時間上の制約により、ほとんどが複数枚の裂を集めて写真を撮影し、整理を行った。そのため、実際には約120点よりもさらに膨大な量のはぎれといえる。これらのはぎれは、柳及び柳工房が、膨大な量の仕事を行っていた証であり、また一つの作品が生まれるまでに、何



写真1 試織はぎれ (計16枚を1点で整理した)

回もの試織を繰り返した跡ともいえよう。

写真1は、試織はぎれの例である。1点(1レコード)に登録されているが、実際には16枚の試織はぎれが含まれている。写真上段の右から2～3番目の裂は、柳拵と呼ばれるデザインで、柳の代表作である。2番目の試織はぎれと3番目の試織はぎれは、柳の葉の間隔が異なっている。

このことから、いくつかのパターンの試織を繰り返し、柳拵の様子が完成したことがわかる。

## ・制作ノート、アイデアスケッチ

制作ノートは織物の組織図や素材、染料などが記載され、制作の際に用いられた。多くはスケッチブックなどに書き込まれ、実際に織られた裂が貼られている場合もある。

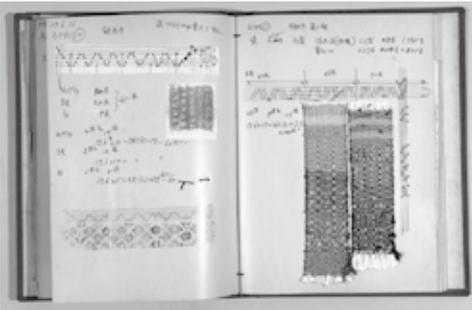


写真2 制作ノート 1984年(昭和59)

写真2は、綾織の変化組織によるネクタイの制作ノートである。綾織の組織図と共に織られた裂も一緒に貼られているため、脚の踏み方によって、織り出される模様が異なっていることがわかる。制作ノートからは、柳がデータに基づいた織物製作を行っていたことが伺える。そしてこのような制作ノートをもとに、多くの試織が織り出され、最終的に着尺や帯、ネクタイ、ショール、マフラー、服地などの作品が生み出されていった。

次に、アイデアスケッチは制作ノートとは異なり、織物デザインに展開させる前段階でのスケッチである。

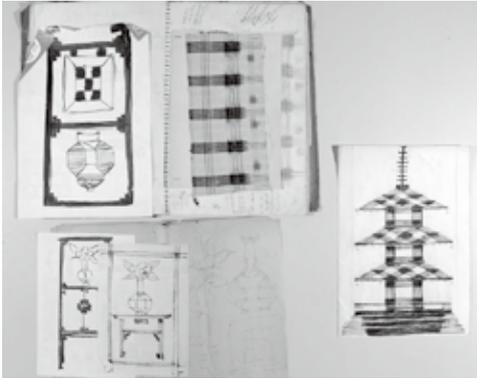


写真3 絣絵のアイデアスケッチ 1960年代

写真3は、絣絵という柳考案による絣織物のアイデアスケッチである。アイデアスケッチでどのような織物デザインにするかの構成を練り、その後制作ノートには、制作に必要な素材や絣の種類、場合によっては組織図などが記載された。アイデアスケッチより、さまざまな模様が試みられたことがわかる。写真

右端の三段の塔の絵は、実際に絣絵「塔絣」として制作され、1978年（昭和53）倉吉工芸展での柳工房展に出品されている。

#### ・ 試織帳、試染帳、混毛帳

試織帳は試織した裂のバリエーションが多数添付されている。制作ノートは、実際に制作しながらまとめていくタイプの資料である。一方試織帳は、制作後、複数枚の試織を後から参照できるようにまとめた見本といえる。

写真4は雷禪（らいふん）試織帳で、雷禪と呼ばれる綾織の変化組織の試織がまとめられている。雷禪模様にも、さまざまなバリエーションがあり、多く

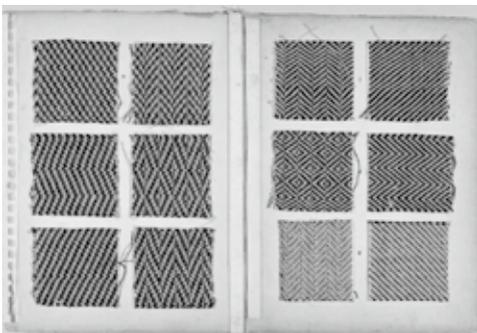


写真4 雷禪（らいふん）試織帳 1950年代頃

の試織が行われた。

次に試染帳は、染料の濃度や媒染剤などの項目を変えて染色を行い、染料を染める際に参考にする見本である。試染帳は天然染料と化学染料の試染帳がある。

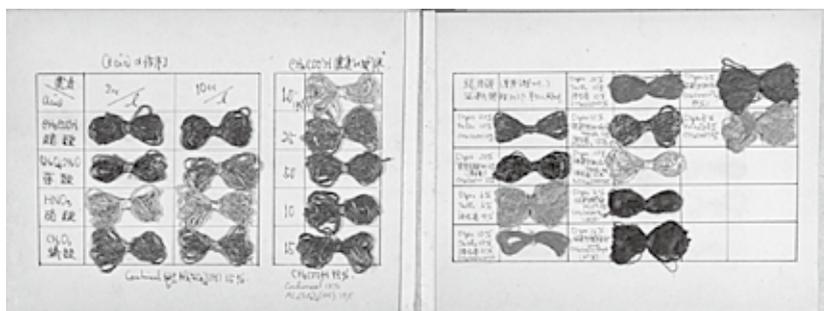


写真5 コチニール染め試染帳 1960年代

写真5はコチニールという天然染料の試染帳である。コチニール染色の際に用いる酸の種類、酢酸の濃度による染色の違いがわかる。織物を織る為には、糸を染めるために染料の知識も必要である。柳は天然染料と化学染料の両方の特性を活かして、織物製作を行った。これらの織物製作には、確かな実験データに基づいて製作された試染帳が必要不可欠であった。

混毛帳は、ウールの混色見本である。柳は絹や木綿、ビニロンなどの素材以外に、ウールの織物製作にも取り組んだ。ウールは、原毛を染色し、染色されたウールを混毛し、糸に紡毛して製織される。混毛帳は、この染色されたウールを混ぜる際に参考となるデータである。

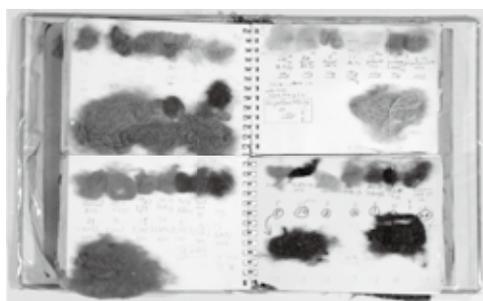


写真6 ウール混毛帳 1972年

写真6は1972年（昭和47）の混毛帳である。写真には四枚のカードがあり、一つをみると、大きなかたまりと小さなウールが見える。小さなウールを混毛して作られたのが、下側にある大きなウールである。つまり、一つの色を作るために、いくつもの色を混ぜ合わせて色を作っている。このような混毛帳は、次の冬に作る糸の色出しであり、毎年製作された。

## ・原稿、写真

原稿、写真には、さまざまな資料が含まれている。原稿は、日本民藝館所蔵の沖縄織物に関する解説の原稿、東京民藝協会連続講演の原稿、文化庁文化財保護審議会専門委員として調査を行った調査報告書の原稿などがある。写真には、女子美の学生の提出課題を写したのものや、戦前の沖縄の写真などがある。

## 3.2 蒐集資料

柳の蒐集品には、沖縄、インドネシア、台湾、インドなどの資料がある。沖縄の資料は、先に述べたように柳自身が戦前に沖縄に調査に訪れ蒐集したものである。他の資料は、卒業生やコレクターなどを通して柳が蒐集したものである。

## ・沖縄資料

沖縄資料は、着物12点、てさあじ10点、ミンサー帯1点である。他に田中俊雄蒐集裂、藤本均蒐集裂、喜久山ヨシ蒐集裂がある。着物資料12点のうち、芭蕉布、久米島紬、宮古上布、桐板がそれぞれ各1点、計4点、残り8点は木綿の絣織物である。木綿の絣織物は、紺地が4点、水色地が2点、白地が2点である。そのうち、紺地の一点は、絣に花織が組み合わせられた読谷山花織で、裏地に紅型が用いられている。てさあじ10点は、紺地が6点、白地が3点、芭蕉布で織られた生成地が1点である。ミンサー帯は、ぐーし花の技法により浮織の模様が表された小巾の木綿帯で、現代に一般的な経絣の柄のミンサー帯とは異なっている。田中俊雄と藤本均蒐集の裂は、田中裂が267点、藤本裂が34点、喜久山裂19点である。



写真7 絹黄色地経緯緋着物 戦前蒐集

写真7は、戦前に柳により蒐集された久米島紬である。素材は真綿紬、柄は御絵図柄で、玉数が少なく大柄である。他にも木綿の紺地緋に御絵図柄の資料が1点ある。このような戦前の沖縄織物は、多くが日本民藝館に所蔵されている。今回本学図書・芸術資料館に寄贈された12点の沖縄関係資料は、量は少ないものの、同時期に柳によって蒐集されたもので、日本民藝館の所蔵品と比較しても遜色ない貴重な織物といえよう。

### ・インドネシア資料

インドネシアの染織品は、1970年代に柳が蒐集したもので、2014年に寄贈された一次資料に含まれ、計24点である。木綿の緋織物、木綿の緯浮織物、バティックと呼ばれる染め物も含まれている。

写真8は、インドネシアスンバ島の木綿経緋布である。具象的な馬や鶏の模様がデザインされている。この具象的な緋模様はスンバの緋織物の特徴である。

### ・台湾資料

台湾のコレクションは1960年代に柳が蒐集したもので、100点である。そのうち肩衣、



写真8 木綿経緋布 1970年代蒐集

胴衣、貝ビーズ肩衣、首飾りが含まれる。特に首飾りのコレクションは、53点あり、貝ビーズ、トンボ玉などが使われている。



写真9 台湾首飾り 1960年代蒐集

が最も多く、絞り染めや木版プリントによるサリーやスカーフ、ターバンなどがある。また、インドのミラーワークと呼ばれる、鏡や雲母を縫い止めた刺繍及びパッチワークの裂、ポシェットもある。

写真9は、首飾りの一つで、トンボ玉の技法が用いられている。黄色、オレンジ、緑などのカラフルなビーズに、中央部分は複雑な模様のトンボ玉がついている。他にも、貝ビーズ、金トンボなど多彩な首飾りを蒐集している。

### ・インド資料

インドの蒐集品は、柳が女子美の卒業生である岩立広子氏の蒐集品の中から集めたものである。インドの蒐集品は64点で、織物と染物、刺繍及びパッチワーク等に分けられる。織物には、カシミアショールがある。染め物



写真10 サリー（部分） 木版プリント インド

写真10は、サリーの部分で、木版による染めがされている。いくつものパターンの木版を組み合わせて染めている。このサリーは絹織物で、薄く軽やかな染物である。

写真11と12は、ミラーワークの布の全体と部分である。写真12より、小さな鏡が刺繍糸



写真11 ミラーワーク インド

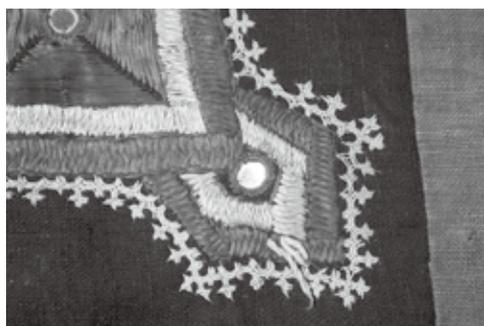


写真12 ミラーワーク（部分）インド

で縫い止められていることがわかる。

#### 4. おわりに

以上のように柳悦孝コレクションは、柳悦孝の作品及び関連資料と、沖縄及び海外の蒐集品からなっている。約790点あまりのコレクションは、本学にとって鎌倉芳太郎コレクションに次ぐ規模のコレクションとなる。柳悦孝の作品そのものは少ないものの、柳が仕事を行ううえで欠かせない、試織はぎれ、試織帳、試染帳、混毛帳、アイデアスケッチなどの織物作品に至るまでの過程に関する資料が多く含まれている。これらの資料は、悦孝の制作意図や作品の変遷を知る上で重要であり、このコレクションの一番の特徴であるといえるだろう。

また、沖縄及び海外の蒐集品も、今では手に入れることの出来ない貴重な資料が多く含まれている。特に戦前の沖縄関係の織物資料は、大変重要なコレクションである。柳悦孝コレクションが本学に寄贈され、活用されることにより、本学の貴重な教育資料となることはもちろんであるが、戦後の工芸織物文化を考える上でも重要な資料であるといえるだろう。

#### ・参考文献

『柳悦孝のしごと 民藝運動と女子美工芸草創期』 女子美術大学美術館、2007